

オリガの詩

ー20世紀ソビエトの盲ろう女性の足跡ー

宮井 清香 広瀬 信雄
(山梨大学大学院) (山梨大学障害児教育講座)

I. 問題と目的

オリガ・イワーノヴナ・スコロホドワ（1911-1982）は、ロシア（ソビエト）の女性盲ろう者である。オリガは、8歳のときに視力と聴力を失ってしまった。盲ろう者としては、ヘレン・ケラー（1880-1968）の存在が著名であり、アン・マンスフィールド・サリヴァン（1866-1933）による教育が多くの人に知られている。しかし、オリガについては、あまり周知されていない。

オリガは、14歳のときに、盲ろう児を対象としたハリコフ・クリニック学校に入学し、そこでイワン・アフアナシェヴィチ・サカリャンスキー（1889-1960）による教育を受けた。サカリャンスキーは、文字を教え込む教育から始めるのではなく、子どもの生理的欲求（寝る、食べるなどの欲求）に基づいた生活のリズムや日課の習熟を重視することから教育を始めた。サカリャンスキーの指導により、身辺自立の習熟を可能にしたオリガは、後に、身ぶり、指文字、点字という順序でコミュニケーション手段を獲得した。

オリガは、音声文字言語を獲得したことによって、自分で感じたことや考えたことなどを表現できるようになった。オリガの著書として、『私はどのようにして周囲の世界を知覚し、表象し、理解するか』¹⁾（1972、モスクワ）があげられる。それは、ハリコフ・クリニック学校で記した作文やメモ、自分の生涯を回想したものが編集された手記である。また、手記には、オリガ自身によって書かれた詩が37編も掲載されている。

オリガにとって、詩作は、自分自身の内観を直接的に、あるいは比喩的に示す手段であったと考えられる。そのため、オリガが書いた詩に着目することは、オリガの生きざまを象徴する資料の一つとしての価値があるといえる。本稿では、オリガによって書かれた詩の概観を紹介する。また、創作された詩の一部を取り上げることにより、オリガが詩を創作していた意味を問うとともに、オリガの思考や生きざまについて考察する。

II. オリガの生涯

1. オリガの幼少期（1911-1921）

オリガは、1911年にウクライナの貧農の家に生まれた。その当時、ウクライナは内戦が

起こっていたため、オリガの父は前線に赴くことになり、オリガは母によって育てられた。母が働きに出ているときは、祖父に預けられることもあった。働き手は母だけであり、弟妹もいたため、家計はますます苦しい状況であった。また、内戦による食糧難が、さらに苦しい生活へ追い込んだのであった。しかし、当時の暮らしについて、オリガ（1972）は、「私の人生の最初の数年、幼年時代がどんなに苦しいものであったとしても、自分が病気になる前までは何と言おうと、それは私の『黄金時代』でした。」と述べている。家族と一緒に暮らす喜びがあったからこそ、オリガはその苦しい生活を乗り越えることができたのである。

しかし、「黄金時代」に値する日々は、突然、終わりを告げてしまう。8歳になったオリガは、髄膜炎に罹り、その後遺症から視覚と聴覚を失ってしまった。すでに祖父は亡くなってしまい、弟妹は他の家に引き取られてしまったので、母との二人暮らしであった。国内では内戦が激しさを増し、母は朝から晩まで働き、生計を立てていた。オリガは、就学する年齢を過ぎていたが、経済的にも、身体的にも就学は困難であったため、夏は木の下で、冬は農民小屋の中で過ごしていたのであった。

母との生活は、長く続かなかった。母は、過労によって結核を発病し、亡くなってしまったのである。母の死により、オリガは一人取り残され、自分一人では何もできない状態になってしまった。母の死を受けとめることは、幼いオリガにとって、苦痛であったに違いない。オリガの幼い頃の思い出は母に結びつくことばかりであったため、深い悲しみに打ちひしがれたと自ら記している。

2. 盲学校への入学（1922-1924）

母の死後、オリガはおじに引き取られて暮らすことになる。おじやその家族は、オリガのことを非常にかわいがってくれたが、その生活は長く続かなかった。11歳になったオリガは、寄宿制のオデッサ盲学校に預けられることになったのである。オリガにとって、生まれて初めての学校生活の始まりであった。

オデッサ盲学校には多くの部屋があり、年齢の異なる子どもたちが一緒に暮らしていた。今までに生活したことのない空間であったため、オリガは、学校自体への戸惑いが大きく、不安と緊張でいっぱいであった。学校の構造を身体で覚えるまでは、学校内を歩くことも怖いほどだった。他の子どもたちが守っている学校のルールも、オリガには簡単に呑み込むことができず、戸惑いの多い生活を送っていたのである。

オデッサ盲学校での生活は、2年間という短い年月であった。初めての学校で、オリガは、学校という空間を知り、同年齢の子どもたちとかかわる機会を得ることができた。盲学校での生活は、盲ろうという障害のあるオリガにとって、最適な空間ではなかった。しかし、学校という空間やルール、人とかかわりを知ることのできた2年間は、オリガが自分自身を意識し始める貴重な時間となったのである。また、それまで、オリガは、新しく起こる環境の変化を否応なしに受けとめていかなければならなかった。喜びの気持ちや、

家族との別れの悲しみを言葉で伝えたり、表出したりすることはできなかった。自分の意思を示すことのできない生活をしていく過程で、彼女は、その生活を打破したいという思いを少しずつ抱き始めたのであった。

3. 盲ろう児のためのハリコフ・クリニック学校へ (1925-1940)

1925年、オリガは14歳のときにハリコフ・クリニック学校へ入学することになった。ハリコフ・クリニック学校は、盲ろう児のために設立された学校である（一説によると、ハリコフ欠陥学研究所に附設されていた）。ここでは、子どもの数がオデッサ盲学校に比べて少なく、部屋も十分にあり、お互いに邪魔になることはなかった。盲ろう児の教育と生活のために、整備が行き届いた学校だったのである。創立者は、サカリャンスキーであった。オリガは、サカリャンスキーのことを「私を人間にしてくれた人」と呼んだほど、オリガにとって、サカリャンスキーとの出会いは運命的なものであった。

ハリコフ・クリニック学校に來たばかりの子どもたちは、自分の周囲にある物を知ることや、その使い方を身につけることに重点を置いた指導を受ける。子どもたちは、日々の生活で繰り返される習慣を次第に理解し、身辺自立を可能にしていく。身辺自立の習熟を第一とする教育は、サカリャンスキーによるものであった。サカリャンスキーは、盲ろう児が日々の生活で触れ、用いる物、かかわる人をとても大事に考えていたのである。身辺自立が形成された子どもたちは、次第に身ぶりをを用いるようになる。その身ぶりは、教師とのコミュニケーション過程で一定の意味をもつものとなっていく。身ぶりを獲得した段階になると、それらは指文字に置き換えられていく。指文字の獲得は、さらに点字の獲得へ発展していく。オリガも、このような学習過程を経た後、音声文字言語を獲得したのであった。

音声文字言語を獲得したオリガに対して、サカリャンスキーは文章指導を行った。サカリャンスキーは、オリガに短い文を示し、オリガはそれを理解する。そして、両者は互いに、文の一部を他の単語に置き換えたり、他の単語を加えたりする。このような学習を繰り返すことによって、オリガは自らの内観を表現できるようになったのである。

オリガにとって、ハリコフ・クリニック学校での生活は、人間的な学びのある日々であった。ハリコフ・クリニック学校は、盲ろう児のための教育と生活が整えられている場所であり、そこでの学びは、オリガの生涯に多大な影響を与えることとなった。オリガは、自ずと大学進学を志すようになった。

ここで、中等教育の教育課程にあたる内容を習得した後、オリガはウクライナ実験医学研究所内で暮らすようになる。時は戦争に向かう最悪の生活条件であった。やがて、ハリコフは、ドイツ軍によって壊滅状態となった。オリガの大学進学は絶望的となった。

4. モスクワでの生活 (1941-1982)

1941年、オリガはウクライナからモスクワへ向かった。モスクワでオリガを出迎えたの

は、サカリャンスキーであった。サカリャンスキーは、モスクワの街並みについて、オリガに指文字で伝えた。オリガは、モスクワに来たこと、サカリャンスキーと再会できたことに、この上ない喜びを感じていた。この旅は、オリガにとって、モスクワ生活の第一歩を踏むための旅となった。

その後、1944年に、オリガはモスクワに住み始めることとなる。オリガは、恩師であるサカリャンスキーが所属する教育科学アカデミー欠陥学研究所で、研究員として働くことになった。この時期は、数々の論文や著書を発表し、研究や著作、講義をする日々であった。また、1963年に、ザゴールスクに盲ろう児のための子どもの家（寄宿制学校）が開設されたさい、オリガも、この学校の設立に尽力し、教育活動に積極的に取り組んだのであった。研究員としてのオリガの活躍、研究や指導助言、相談活動は、ソビエトの盲ろう教育の発展を支えるものとなったのである。

Ⅲ. オリガの詩から見えてくる彼女の生きざま

1. 詩作に取り組むオリガ

さて、文字を綴ることを習得したオリガは、積極的に創作活動に取り組むようになる。創作活動の一つは、詩作であった。詩作に取り組み始めたのは、1932年（オリガは21歳）という記録が残されている¹⁾。サカリャンスキーは、ハリコフ・クリニック学校で詩を書く学習を導入していたため、オリガも詩を書く学習に取り組んだ。詩は、いくつかの短い文で構成することができ、一定のリズムや形式に則った言語表現が可能である。盲ろう児にとって、一定のリズムや規則性がある文は非常にわかりやすい。そのため、サカリャンスキーは、盲ろう児が言語表現を学習するための有効な教材として、詩の学習を取り入れていたのである。

オリガの著書（1972）¹⁾に掲載されている多くの詩について、ヴァレリー・ニコラエヴィチ・チュールコフ（1939-1997）^{*1}は次のように解釈をしている。「詩文の中で、オリガ・イワーノヴナはより自由で、芸術的な意図を追求して、それと自分の生活体験とを結びつけて再構成している。（中略）彼女の詩をよく味わい、掘り下げてみようとする価値はあるだろう。そうすれば気付かされることだが、その中に表現されている感情は賃借りしたものではないし、また作者が織り込んだ単語の中に思考をこじつけているわけでもないし、大胆にも隅々までわかりやすいものであろうとして、本物の強烈な情緒の表現を探し求めていることがわかる。」チュールコフが指摘するように、オリガは、詩作を通して、自分自身の思考を映し出すことを追求していたと考えることができる。

2. オリガが創作した詩の概要

オリガが創作した37編の詩のタイトルを表1に示す。ここで示す詩のタイトルは、著書¹⁾で示されている順番と同じである。なお、邦訳は筆者によるものである。頭文字を示すロ

シア語の邦訳については、英字アルファベットに対応させている。

表1 オリガが創作した37編の詩

	詩のタイトル (原文表記)	言語	邦訳
1	ДУМАЮТ ИНЫЕ	ロシア語	ある人たちは考えている
2	МУЗЫКА ВО СНЕ	ロシア語	夢の中の音楽
3	Я ГОЛОСУЮ	ロシア語	私は投票する
4	Я КОМСОМОЛКА	ロシア語	私はコムソモール
5	К БЮСТУ А. М. ГОРЬКОГО	ロシア語	A. M. ゴーリキーの胸像にささげる
6	ЗА МИР	ロシア語	平和のために
7	ВЕСНА	ロシア語	春
8	ОСЕННИЕ ЗВУКИ (Н. А. Домбровской)	ロシア語	秋の音 (N. A. ドンブロフスカへ)
9	У МОРЯ	ロシア語	海辺にて
10	СТРАНА РОДНАЯ	ロシア語	母国
11	К ОТЧИЗНЕ	ロシア語	母国のために
12	ПРОЩАНИЕ	ロシア語	別れ
13	СОРАТНИКАМ	ロシア語	戦友に向けて
14	8 МАРТА	ロシア語	3月8日
15	КОЛИ ЦВІЛИ КАШТАНИ	ウクライナ語	カシが咲いたとき
16	ПАМ'ЯТІ А. М. ГОРЬКОГО	ウクライナ語	A. M. ゴーリキーの思い出
17	ВСТРЕЧА С ПУШКИНЫМ	ロシア語	プーシキンとの出会い
18	К ПОРТРЕТУ РАФАЭЛЯ (И. А. Соколянскому)	ロシア語	ラファエロの肖像にささげる (I. A. サカリャンスキー先生にささげる)
19	К ДРУГУ	ロシア語	友よ
20	К***	ロシア語	・・・へ
21	СОЧИНСКИЕ МИНИАТЮРЫ 1 Ветер и море 2 Ветер и солнце 3 Солнце 4 Сочи (посвящаю Т. А. Соколовой)	ロシア語	ソチの細密画 1 風と海 2 風と太陽 3 太陽 4 ソチ (T. A. ソコロワにささげる)
22	К ДРУГУ	ロシア語	友よ
23	К МОРИЮ * 2	ロシア語	海よ
24	К МОРИЮ * 2	ロシア語	海よ
25	К МОРИЮ * 2	ロシア語	海よ
26	К БРАТУ (В. И. Скороходову)	ロシア語	弟へ (V. I. スコロホードフへ)
27	ДЕТСТВО ГРУНИ	ロシア語	グルーニャの子ども時代
28	ПЕСНЯ ОСЕННИХ ЛИСТЬЕВ	ロシア語	秋の葉の歌
29	ЛЕТНЕЕ УТРО	ロシア語	夏の朝
30	РАННЯЯ ОСЕНЬ	ロシア語	初秋
31	ВЕЧЕР (Н. Б Коваленко)	ロシア語	夕方 (N. B. コヴァレンコ)
32	К Ф. С.	ロシア語	F. S. へ
33	ГРОЗА	ロシア語	雷雨
34	УХОДИ (Из Гейне)	ロシア語	あっちに行け (ハイネより)
35	К ВЕТРУ	ロシア語	風よ
36	ПИСЬМО	ロシア語	手紙
37	ОТРЫВОК (Подражание Шота Руставели)	ロシア語	断片 (シュタ・ルスタベリを真似て)

表1より、オリガの詩は、「人」、「季節」、「風景」、「思想」、「生活体験」などを描写の対象としていることがわかる。詩作で使用している言語は、35編がロシア語、残りの2編はウクライナ語である。ウクライナ語が含まれている理由は、彼女の第一母語がウクライナ語であるためである。視覚と聴覚を失った8歳以前は、ウクライナ語を用いて生活をしていたといわれている。つまり、ロシア語は後に獲得したのである。

詩の形式について、ロシア詩には、それを構成するための詩法があるといわれている。頻繁に用いられているのは、「音節アクセント詩法」である。沼野（1998）によると、音節アクセント詩法とは、「詩の各行の音節数とアクセントの配置を一定に揃える詩の書き方」である。オリガの詩を具体的に見ると、一定の規則性に則って、詩作をしていることが推察できる。このことより、盲ろうのオリガにとって、一定の規則性やリズムを求められる詩作は、言語表現をしやすい手段であったと考える。なお、オリガの詩に見られる一定の規則性については、機会を改めて述べることにする。

すべての詩は、創作された時期について明記されていない。そのため、オリガの年齢や生活状況と照合させながら、各詩に表されている彼女の内観の変化を時系列に分析することは困難である。しかし、各詩の内容から、彼女の思考や生きざまを浮き彫りにすることはできるだろう。そこで、本稿では、25編目に掲載されている『К МОЮ (海よ)』*2を取り上げる。邦訳は筆者による。

3. 『К МОЮ : 海よ』について

(1) 原文および邦訳

По тебе душа тоскует,
Друг могучий, друг мой грозный.
Над тобой весна ликует,
Красотой пленяя звездной.

汝に心焦がれり、
力強い友よ、私の恐るべき友よ。
汝に春が歓喜せり。
星のような美しさで魅了せり。

Страстно рвусь на юг любимый,
Мыслью вижу берег милый.
Зной, порою нестерпимый,
Ощушаю с прежней силой.

愛する南の地に夢中になってひた走り、
愛しい岸辺が思い浮かぶ。
時に耐え難き炎天を、
かつての力と感じれり。

Друг великий, друг мой море —
Необъятное, как думы.
Ты играешь на просторе,
Дай же мне воспринять шум!

偉大な友よ。私の友、海よ—
夢想のごとく果てしない。
汝は自在に戯れ、
我にざわめきを感じさせよ！

Твой простор я не увижу
Созерцать не буду дали ;
Тем понятнее и ближе
Мне твои порывы стали.

我はその海原が目に見えず
思い浮かべるには程遠く；
より鮮明に、より身近に
我に激しい波の一撃を与えよ。

Красоту ведь можно видеть
Не одним орлиным взглядом
Чтоб любить или ненавидеть,
Глаз орлиных мне не надо.

Друг могучий, ты внушаешь
Страсть великую к бореньям,
Зовом гневным призываешь
К необычным дерзновениям.

И веками с тем же рвением
Все гремит твой клич могучий :
К битвам! к бурям! к дерзновениям!
Отзвук вторят в небе тучи.

Так тебя я представляю,
Друг великий, друг мой грозный.
Рвусь к тебе, к тебе зываю,
Жду призыва ночью звездной.

真の美しさを見るは
ワシのような鋭い視線だけではない
愛したり憎んだりするための
ワシのような目は不幸なもの。

力強い友よ、汝は抱かせる
闘いに向かう勇ましさを。
激しいエールで、励ましておくれ。
大胆不敵にさせたまえ。

幾世紀も同じ情熱で
あなたの力強い大きな叫び声はあらゆるものをとどろきます。
会戦へと！嵐へと！大胆不敵にと！
反響が黒雲の空に鳴り渡れり。

汝は我にかく思い浮かべり、
偉大な友よ、恐るべき友よ。
汝に向かつてひた走り、汝に向かつて叫ぶのだ。
海のごとき星夜の瞬きを待てり。

(2) 詩作の背景

『К МОЮ : 海よ』を創作した背景について、オリガは著書¹⁾で取り上げている。

「私は、いつも水浴したわけではないにしろ、何回となく海に行ったことがあります。ときおり、ただ海岸に腰を下ろして、砂地を引っかき回して、大きさも表面の滑らかさも大体同じになるように石から石を拾い集めました。このような場合、嗅覚と皮膚感覚によって私は海を知覚することができます。私は海の独特な匂いを感じますし、砂浜を暖めている太陽をとくに強く感じ、また波打ち際から私に届くしぶきを感じます。しかし、一年中いつでも、自分がどこにいるかに関係なく、自分は海の鋭い匂いを感じているかのようだわ、と想像することができます。

いつでしたか、モスクワの、ある春の夜、私は眠れませんでした。私は夏休みを何ヶ月間、どこで過ごそうかと考えました。私は海へ行きたいと強く思いました。そのことを考えているうち、不意に私は海の匂いをはっきりと感じました。時を追ってこの匂いはだんだんと強くなり、しまいには、本物の海の匂いを実際に感じたいという何かたまらない欲求が私をとらえてしまいました。この、海への思慕は、自分の気持ちを言葉で表したいと欲して、筆記用具と紙をとり、『海よ』という完成した詩を一気に書き上げることによって幕となりました。」

オリガは、自身の教え子である学生たちと談話をしていたとき、興味を惹く質問をされたことがあった。それは、「そのときには感じていないような匂いを随意的に、故意の希望によって表象することができるかどうか。また同様に、私の近くには存在していない人々や事物の像を記憶の中に随意的に引き出すことができるかどうか。」という質問であった。この質問に答えるための一つの例として、『К МОЮ : 海よ』という詩を創作したとき

のことを述べたのであった。

(3) 解釈

オリガは、海への思慕を表現したいという欲求から、この詩を書き上げた。「海」を「友」と呼び、海の匂いを感じたいと強く望んでいるのである。「愛する南の地に夢中になってひた走り、愛しい岸辺が思い浮かぶ。」という表現は、海に行き、海の匂いを感じたいという気持ちをありのままに示している。

3連では、果てしない海の揺れを感じたいという気持ちを感じ取ることができる。海のざわめきは、盲ろうのオリガにとって、海という風景を知覚するための一手段となっていたに違いない。振動感覚を用いて海を知覚していることを想像することができる。4連では、「より鮮明に、より身近に、我に激しい波の一撃を与えよ。」という表現によって、近くで海を感じたいという気持ちを改めて強調している。

オリガの海を感じたいという思いは、決して「海を見るための視覚が欲しい」ということを意味するのではないようである。それは、5連に表れている。たとえ目が見えなくても、海の美しさを感じることができるというオリガの思いは、盲ろうという障害を乗り越え、前向きに生きる姿を映し出していると考ええる。

6連と7連は、当時のソビエトの社会情勢を物語っているようである。オリガが詩作に取り組み始めた頃のソビエトは、戦争が始まろうとする時代であった。オリガが生活していたハリコフは、ドイツ軍の攻撃により、住み続けることが困難になってしまったのである。海の力強さによって、闘いへの恐怖を受けとめてほしいというオリガの願いを読み取ることができる。

この詩から、オリガは、単純に海の匂いを感じたかったわけではないことがわかる。オリガにとって、海は、自分自身に力を与えてくれる偉大な存在であったに違いない。

IV. 考察

オリガにとっての詩には、文学作品としての詩、そして内的表現としての詩という二重の意味があると考ええる。前者については、ロシア詩の規則性に基づいた詩を構成していることによる。自分自身の思考を音やリズムと結びつけて詩を創作していることは、文学作品としての意識をもっていたことを想像することができる。後者については、本稿で取り上げた『К МОЮ : 海よ』という詩のように、風景を描写の対象として自身の思考や感情を表現していたことからいえる。オリガは、自身の内観を具体化する一つ的手段として詩を創作していたのである。また、詩の中に自分の思考や感情を表現することを通して、社会の中で生きているということを実感していたのかもしれない。つまり、詩の中にこそ、オリガの一人間としての思いや感情が表れていると考えることができる。

オリガは、盲ろうである自分の存在を否定するかのように、自殺行為に及んだこともあった。しかし、オリガは、自殺行為を愚かなこととし、いつしか自分の力を信じることがで

きるようになったのである。創作活動は、オリガにとって、人生を肯定する出発点となるものであった。オリガは、詩作を通して、生きる術を見出し、自分が生きているということ意識していたのかもしれない。

オリガの詩については、そこに用いられている表現方法を明らかにするとともに、彼女を取り巻いていた環境や、かかわりのあった人物などに着目しながら、彼女の内観をさらに追究することが課題である。

註釈

- *1 ヴァレリー・ニコラエヴィチ・チュールコフ（1939-1997）ろう児や盲ろう児の教育分野の専門家、心理学修士、ソビエト連邦教育科学アカデミー治療教育研究所の上級研究員であった。1968年から、上述の治療教育研究所で研究活動を行うようになり、自らの生涯を終えるまで科学的な研究を続けた。1981年から1996年は、盲ろう児の研究と養育実験室を主導していた。彼の指導のもとで、現代的な盲ろう児の学習指導要領が作成された。それは、盲ろう児の教育実践の場で、成功的に用いられていた。また、盲ろう児のためのザゴールスク子どもの家（寄宿制学校）や、モスクワの盲ろう児の実験グループを対象とし、盲ろう児の教育内容と方法を研究していた。彼は、ソビエトの盲ろう教育の発展に尽力した人物である。
- *2 『K MOPIO : 海よ』というタイトルの詩は3編あるが、内容はすべて異なる。



資料1 オリガを囲むゼミナール（1970年代）



資料2 点字ディスプレイを読んでいるオリガ（1960年頃）

文献

- 1) Ольга Ивановна Скороходова (1972) Как я воспринимаю, представляю и понимаю окружающий мир. педагогика, Москва.
- 2) А. Н. Леонгьев (1980) Об опыте обучения слепоглухонемых. Хрестоматия по возрастной и педагогической психологии, Издательство Московского Университета, 251-254.
- 3) Т. А. Басилова (1987) Условия формирования первоначальных жестов у слепоглухих детей. Дефектология, 1, 11-16.
- 4) ヴァスクレセーニエ編集部編・広瀬信雄訳 (1997) みえる・きこえるー指先の世界ー. 新読書社.
- 5) 広瀬信雄 (1997) サカリャンスキー先生と子どもたちーもう・ろう重複障害児教育の記録ー. 湘南出版社.
- 6) 植田宏昭 (1997) ロシア詩法とその用語について. 早稲田言語研究会会報, 2, 53-67.
- 7) 沼野充義 (1998) 吟遊詩人オクジャワの世界. ロシア語講座, 36 (8), 48-49.